

講演要旨

# 映画監督って何だ!

映画監督 成田 裕介 氏 (昭和46年卒)

映画界に入ったのは不純な動機からだ。高校卒業後、何かをやりたいという情熱を持ちながら定まらず、二十数種の職業を転々とした。

そんなある日、なじみの飲み屋での知り合いに、「お前は『コレ』をこますのがうまいから『コレ』を二人も



【略歴】1971年3月秋田高校卒業。本名・成田裕一。20数種の職業を経験後1976年、偶然にも映画界の知遇を得る。1987年、テレビシリーズ「あぶない刑事」で監督昇進。日本映画監督協会常務理事、日本宝塚映画監督協会正会員、アカデミー賞協会正会員、メディア芸術大学造形芸術学部教授。

かかえて女優に仕立て上げたら『左うちわ』だけ『』と言われた。その後、映画の世界をまったく知らない駄目だから一度『現場』に行

ってこい、と紹介されたのがピンク映画だった。

監督は高橋伴明さん。いきなり女優の『前振り』を作られた。最後はフィルムを編集用に仕分けし、機械で切

たり張ったりと一本の映画を仕上げるまでやらされた。これがこの世界に入るきっかけ。

映画を一本撮ると言ってもピンからキリまでである。通常九十分の映画を撮る場合、毎日三十人以上のスタッフが動いて、一カットずつを撮り上

げる、地味な仕事が続く。二週間から一カ月、制作費は億から数十億、数百億までかかる。その点、ピンク映画の制作費は、四十年前から三百万円前後と変わらない。十人前後のスタッフが何から何までやって、四日で撮り上げる。そのうち二日は徹夜の作業。監督は、一時間ほどの作品の中に女優の裸を二十分ほど入れれば、あとは何をやってもいいことになっている。どんな過激なものであろうが、自分の表現したいものを堂々と盛り込める。制作に一切の制約がないことである。

自営業者が撮っている。その七割以上は、ピンク映画育ちの監督だ。監督とは「百人いれば百通りのやり方がある」と言われている。その原点となる個性がどういふところに

秋田県民会館において十一月六日午前十時から秋田県民演奏家によるオーケストラ公演が開催されました。秋田高校の校歌が管弦楽によって演奏され会場が厳粛な雰囲気になりました。「浜辺の歌」をテーマにしての楽器紹介は、オーケストラを初めて聴く生徒にとっても丁寧でわかりやすい構成になっていました。指揮者体験コーナー



## 指揮者体験コーナー

です。一年生の加藤君は独特のフォームで出だしを決め快調なテンポでオーケストラを引っ張りました。自分のテンポ感をしっかりと持っているのが音楽が締まって大変素晴らしい出来でした。二年生の鈴木君は、さすがに指揮を経験しているだけあってオーケストラの運びがスムーズです。指揮においての凶形も正確で演奏が安定して心地よい響きを出していました。三年生の鏡君は、音楽の決め所を大胆に表現し、聴衆へのアピール度は一番でした。初めての指揮者としてはなかなかむずかしい左手の使い方も大胆で、感動的な演奏に聴衆は惜しみない拍手を贈っていました。カルメン組曲からアルゴネーゼ、トリアドールの二曲は、重厚で華やかな響きがあったし、ベートーベンのエグモント序曲は音楽の推進力に満ちていて演奏力の高さを発揮していました。県内在住の、音楽の専門家を中心に編成されたこのオーケストラは、響きに透明度があり今後の活躍が大いに期待されています。

指揮者 川口 洋一郎